

宇宙の真相

小野 尙 次

お笑ひ草

(一九二三、三月)

ゲーテは云つた。

一體此の世界を奥の奥で統べてゐるのは何か。

それが知りたい。そこで働いてゐる一切の力、一切の種子は何か。

それが見たい。……………。

之は我々の感じを暗示的に、總括的に言ひ表はしたもののまゝしてゲーテならでは云ひ得ない言葉である。

之は同時に彼の體驗である。

之こそは哲學では宇宙の窮極の問題であり、又一切の本質の問題であり、「時間と空間」の問題である。

宗教では神の問題であり、物理學では原子構造の問題であり、醫學では生命現象の問題であり、ニイチエにあつては自然の本文の問題である。

そうして之は永遠に解かれざるが儘に残つて行く永劫の謎である。

若し性急なる人あつて「我れ解決したり」ごなさんには、そは獨斷にして、價值創造の世界を知らざる井中の蛙たらんのみ

ゲーテの言は人間本然の欲求であり、詳しく云へば、當爲である。

然らば上の如き欲求に對して如何なる解答が出るか。我は全科學、全哲學、全宗教を以て之に答へねばならぬ。然もその答たるや吾人は孰れにも眞實の満足を見出し得ないのである。斯くてこそ上の問題は永劫の謎として最高の價值を持つてゐるのである。

科學を以て唯一の解決とすものあらば、又唯物論を以て一切とすものあらばそは獨斷であり盲斷である。されば田邊元氏の科學概論にある次の言葉に耳を傾けなければならない。「哲學は科學と離れては其有力なる材料を失ひて空虚に陥らん」とし、科學は哲學を離れては其立場を照らす光を失ひて盲目に陥ることを免れないであらう。」

批判哲學の立場から觀れば確かにかうなくてはなるまい。我々は更に別の方面から科學に對する見解を聞いてみなければならぬ。それはロシアの人トルストイである。彼は本當の意味で人間であつた。

トルストイは「我等何を爲すべきか」の中に於て次の様に云つてゐる。

「隆盛なる科學は、莊嚴らしい様子を裝うて、人生の一切の問題の解決は、ただ自然の事實、特に有機體の事實を研

究する事によつて得らるるを斷言する。

輕信的な青年の群は、この權威——破壊されたことのな
いばかりでなく、批評されたことすらもない——の新奇な
のに征服せられて、一代を支配してゐる教理の保證に従へ
ば）そのみが人生の一切の問題の説明に迄導き行くこと
ふことの唯一の道、即ち自然科學の事實の研究に走つた
併し、學生が此の研究を進むれば進む程、人生問題の解
決の可能から遠るばかりでなく、解決しようとする思想そ
のものをすら失ふ様になる。また彼等が言葉の上に表はれ
たる他人の觀察を信する程にも（細胞や原形質や物質の第
四廣義表なきこと云つた様なものを信すること）自分自身を
觀察しない事に慣れば慣れる程、益々多く形式がその中
心をかくす。善惡の意識を失へば失ふ程、また、今迄の人
類の經歷を支配して來た善惡の表現及び定義を了解する方
を失へば失ふ程何等共通的な人類の意義を持つてゐない所
の、條件的ないふ特殊な科學的通用語を自らに利用する様
になる。何者かに輝かされて、觀察の深林に踏み入れば入
る程、獨立的な思想の力を失ふばかりでなく、彼等のタル
ムッド（猶太教の所依の經典）の中に包含されてない、他の
人の精新なる人類の意志を了解することすら出來なくなる
却つて、生活、即勞働の習慣を失つて、その最も善い時代

（六）

を過ぎ、そして自らの地位を是認されて居る様に惟ふに
慣れ、かくて肉體的には何の役にもたぬ寄生生活となり
精神的には頭腦を空虚にし、思想を産む一切の力を失ふに
至る。

かくて彼等の才能は益々鈍くされる。そして段々自恃
の習慣を獲得し、そのために單純なる勞働生活や、人類の
簡單明瞭にして共通的な思考法に歸る可能を永遠に掠奪し
てしまふ様になる。」

トルストイは愛の人である。そうして愛は人間に取つて最初
にして最終のものである限り、彼の圓熟したる此の思想はお
のづから權威を持つてゐる。然らば科學者の立場は無くなる
であらうか。人間は幸福と平和と愛とにその最終の理想境を
畫くべきであらうか。我々は更にニイチエに聞かなくてはな
らぬ。

ニイチエ曰く、

「我は汝等の幸福を求め、安寧を求むることを願はず。我は
汝等の憩はんより、寧ろ働かんことを願ふ、働かんより否
寧ろ戰はんことを勧む。我は汝等に和睦する事を勧めずし
て寧ろ征服する事を勧む。汝等の勞働を戰闘に化せよ。汝
等の平和を去つて戰の勝利につけ。

我が苦患と我愛と——何の問ふところぞ。我はそもそも幸

福を求むるか。否、我は我が事業をこそ求むるなれ。

いざ。獅子は來ぬ。我が兒等は近し、我は熟したり、我が時は來れり。

此は我が朝なり、我が日は始る。來よ、さらば來よ、汝大なる正午よ。」

斯くて彼は其洞を去りき。そは恰かも暗き山より來る旭日の如く、強く且つ熾んなりき。」

我々は孰れに聽くべきか。外界は種々様々である。我々は自己に歸らなければならん。そこで

カントはいふ。

Handle so, dass die Maxime deines Willens jederzeit zugleich als Princip einer allgemeiner Gesetzgebung gelten könne.

ん。

カントを批評する事は容易です。カントを非難する事は更に容易であります。だがカントの境地に至り得る事は至難です。カントは内に求めました。併しカントの次の言葉は更に重要な暗示を吾人に投げ掛けます。即ち曰く

「それを考ふるこゝに屢々にして且つ長ければ長き程に、常に新しく増し來る感嘆と崇敬とを以て、心情を充すもの二つあり。

我が上にありては星ある空

我が内にありては道德法。」

此の言に至り得て始めて宇宙を語り、自我を語り得ると思はれます。我々は絶叫したい。

「宇宙は最高の道德である。」

内へ内へミ内省の世界深く入り込むこゝ、それなくば人間は如何に空虚なものとなるであらう。沈思の窮極に於て吾人が得たもの、それこそ本當の直理である。我々は獨斷は退けなければならぬ。だが思惟の窮極に於て、あれでもない此れでもない。さうしてもこれださういつて掴み、投げ出したものは最高の獨斷即ち真理そのものである。

カントが

斷言的命令を最終のものゝなせしも亦宜なるかな。

我々が内省の世界深く入り込む時、其の追求は無限であらうだが我々は確かに何ものかを得るのである。例へばカントが時間ミ空間ミを直觀形式なりミせしが如し。之をしも疑はば其追求は無限なる。而して飽く迄疑はばそれは自己自殺である。我々は窮極に於て肯定しなければならぬ。而して窮極に於て肯定したものは其の性質を問ふてはならないのである。例へばカントが「先天」ミいはゞ其の「先天」ミは何ぞやミ問ふてはならないのである。同じ事は次の場合にもいへる。人ありて「我れ神を信ず」ミなさんに「神ミは何ぞや」ミ問ふて

はならないのである。最終のものは其の性質を問うてはならない。最終のものは最高の信仰であり、最高の獨斷即ち真理であり、之に觸れ、之を疑はば信仰破れて最早やそは信仰たり得ず、窮極の把捉たり得ざるなり。

然らば飽く迄一つの信仰を盲目的に信すべきであるといふのであるか。否。吾人は成りにし信仰を時來つてか之を粉碎し再び疑惑に悶え、努力の世界に入り新らたなる信仰を樹立せざる可らず。此處に創造あり、進化あらん。

然らば吾人は絶えず信仰を破壊する事を以て能事となすべきか。之に答ふる前に吾人は一つの重大なる轉廻をなさざる可らず。

我々は思惟の世界深く入り込む。然し思惟のみが一切ではない事を知るであらう。此處に於て吾人は外界を觀なければならぬ。精神界の奥深く入つた吾人は其處にのみぎうしてもゐられなくなつて外界を觀、經驗の助を借りなければ到底解決の出来ないのを知るであらう。けれど外界のみでは飽きたらなくて再び思惟の世界へに分け入らねばならなくなる。かくて吾人は外界と精神界との接合點である自我を持して或時は考へ、或時は觀、知り、飽く迄實行し、實現して行かなくてはならぬ。此處に於て行ふ事意義が生じて來るのである。

然らば行ふは何ぞや、それは如何なる重要さを有するや。

紀平正美先生は「行の哲學」に於て次の様にいつてゐられる。

「原理なき生活は空虚なり、實生活に基かざる知識は戲論なり、如實の經驗を組織し、轉回し、價值創造者としての人格は即ち菩薩なり。」

まことに至言である。

價值創造の實行者こそはまことの人間である。

然るに實際に實行し、實現するといふ事は非常な難事である

「ローマは一日にして成らず。」

といふ。況んや價值創造の實現をや。外界を究める事、思惟し行く事、そは一朝一夕の事ではない。

「唯一つの星の中にも宇宙の神祕がかくされてゐる」

と云つた人があるが、唯一つの石ころさへも本當に知つた人は今迄に幾人あつたらうか。

實行、實現は困難である。ややこもすれば吾人はひるむ。此の時我を導くものは信仰である。而して其信仰たるや完き信仰でなくては力にはならない。さればこそ實行、實現の場合に於ては信仰の本質は問ふてはならない。信仰の本質を問ふ時其處には信仰は破れ、力は消失し、行は完からず。さればこそ、法華經を振りかざした日蓮に於ては法華經の三字は信仰にして、同時に力たり、然も法華經の三字を分析して其の

内容を問ふ如きことなくして幕進する所に法華經の大行者たるの面目がある。

ニイチエが「超人」を叫んだ。然も超人の本質を問ふてはならないのである。超人、超人ミ絶叫しながら幕進行くところにニイチエの面目がある。

然しながら機熟し、時至つてか、其の信仰はついに破られねばならぬ。其處に創造生活の本來がある。之で先の答も出来たわけである。斯くて吾人は信仰を持して進み、時來つてか之を破壊し、かくて破壊、保持、生命の常に新しく、常に創造を實現し行くところに人間の意義がある。即ち停止することなく常に生む事を實行して行くところに男子の本領がある即ち絶えざる煩悶の姿、絶えざる努力の姿、終るなき苦の姿その焦熱地獄の苦患を其の儘、悟りミ觀じたい。

而して其の苦の窮る所に於て自己を導くものは自覺せる信仰である。

我々は宇宙開明の爲に進む者である。然らば科學が宇宙開明に於て如何なる役割をつとむるか。吾人はそれを吟味してみよう。

紀平正美氏は「行の哲學」に於て

『斯る「物理の世界」(ミンコウスキーの)は猶ほ可能の世界なり、現實世界の總てにあらずして、抽象の世界たるのみ

即ち現實世界は單なる機械的のものにあらずして、又よく價值の世界たればなり。』

價值の世界、そうである、確かに價值の世界でなければならぬ。又同著中

「抽象の原理の下にのみ、研究せられたる法則は、法則として働く其範圍以外には未だ及ぼし得ず。従つて自然を抽象的の法則にて見ることは、一面的のものなり、未だ自然其自らにはあらず。……………」

科學は一面的のものである。決して全體ではない。科學は機械觀を取る。然しながら、

「價值の上より考ふれば、實現の原動力は外的のものにあらずして、内在的のものなり。」(行の哲學)

科學は一切ではなくして一つの見方なり。而して「何故に」の問には毫も答へ得ざるならん。

然らば宇宙ミは何ぞや。

科學的の機械觀のみが唯一の宇宙觀ではあるまい。

私は云ひたい、

宇宙には美しい理學的の法則が行はれ、一つの物理系を作つてゐる。つまり宇宙は一つの有機體である。此の美しい有機體たる宇宙は其の中に於ける物理學的の法則なる知的分子を加味しても完全なる藝術的對象として價值あるものであると思

ふ。我々は數量的に物理學の對象として宇宙を取り、又宇宙を思惟の對象として取る外に、宇宙を質的に、又美的に、又超人感的に見るものとして取るべきであると思ふ。即ち宇宙は科學と哲學と宗教と藝術の混然融合せる所に其の眞實の意義と價值とを唯一的に有するものとして取らるべきである。かかる意味に於ける宇宙こそ眞實の有機體であり、そを追究する所に人間活動の一つの重大な意義が存するのであると思ふ。

而して科學、哲學、宗教、藝術が自我に依つて統一され、一切外界と一切精神界の接合點たる自我が行の哲學によつて價值創造の實現を行使する所に男子の意義がある。

さればこそ叫ぶ、

天文學は男性が大天地に捧げる眞心である。こ。

ゲエテは何んぞ云つたか、

自然の面前に、男一人になつて立つたら、人間として生きる甲斐があるだらうに。こ。

人間が一箇の男子として大自然に對した時、背後に横はる浩瀚なるイデーの世界を持して、其處に發現する價值創造の行への轉化は人間活動の重大な發現である。而も智は、眞實の智は腹にある。決して頭にはない。才智こそ頭にあれ、行の哲學に於て創造實現の原動力は腹にある。

(100)

科學は機械觀である。然らば科學の意義はいづこに存するか科學者が自然を征服せんとして自ら科學に捉はれざる限り、科學が其の立場を自覺して、文化の一員として其の役割を務める限り、科學は文化に貢獻し、宇宙開明の一助となるのである。然も我等は飽く迄、一箇の人間として、科學、宗教、藝術、哲學を内面的に統一して、宇宙觀を構成せざる可らず科學は手段たり、部分たり。而して全體たり、目的たり得るは、宇宙ミイデーの世界の自我に於ける統一のみ。而して此の意識を得たる後、創造たる行への發足をなさざる可らず。

而して手段たり、部分たりし科學は此の行に於て、目的たり全體たり得るのである。即ち實行への轉化は科學をも目的化するなり。吾人は全體を知る前に部分を知らなければならぬ科學により、宗教により、藝術により、哲學によりての一つ一つの創造がやがて積んでは一大宇宙の殿堂は成るのである科學を究めるさへ容易ではない、眞實の宇宙觀形成迄には、哲學的思惟、藝術的直觀、宗教的信仰の實をも得なければならぬ。吾人は信仰を以て一つ一つの煉瓦を積み上げて行かう測地等の實際問題から抽象されて出來て來た幾何學が、又幾何學に限らず一般に數學といふものが先驗的科學として發達して來た有様は純粹科學の美しい繪巻物である。西洋紀元前約三百年の頃、ユークリッドが幾何學を組織立て

てから、十九世紀の初めにロシヤ人ロバチエウスキーが非ユークリッド幾何學を創め、リーマン等ありて、更にアインスタインに依りて相對性原理に用ひらるるに至る迄、面白き道筋ならずや。一方物理學に於てはニュートンあり。ああニュートンそは科學者特に物理學を修むる者に取りて如何に意味深き言葉ぞや、彼の眞理を見つむる眼の清らかさ、その神の如き風貌の中に刻まれた人間の苦の深さ、その涙ぐましき眼の奥底には如何なる宗教が宿りけん。

ニュートン出で、よりの多事なりし物理學に於て、プランクの量子論、アインシュタインの相對性原理に於て、理論物理學は美はしくも進み行く哉。

光が其の科學的本質に於て如何に電磁氣と結びつき、かくて全物理學は如何に原子構造論に集中し行く事よ。而も原子構造論に於て、物理學の根底を問はんとするものはポアンカレと共によりて科學と假説の根底を明かにせざる可らず。

而して空しと思はれるたる空間が質量による力の場として、光の場として、電磁氣の場として如何に豊かなる眞理の寶庫となり來りし事よ。而も時間と空間の本質を質さんとするものは科學の領域を越えて哲學の世界深く分け入らねばならぬ。一方天文學は其實測と理論とに依り、宇宙現狀論、宇宙進化論は大自然の行進曲につれて進軍してゐる。

ニイチエの掲げた超人は要するにニイチエのものでありました。それは電光でありました、啓示でありました。然し我々は電光によつて上に昇る事は出来ない。我々の足はしつかり地にいついてゐるのである。

佛教は要するに釋迦のものでありました。キリスト教はキリストのものである。法華教は要するに日蓮のものである。

やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲
之は要するに芭蕉のものでありました。

我々は天上天下唯我獨尊、天蓋孤獨。我々は獨りイデーの世界を持して、宇宙に對し、自ら創らねばならない。其處に價値創造の世界があり。其の行に最終の男性美がある。而してただ一つの事、それは

冒頭に掲げたゲーテの命題は永久に解かれずして残り行く所の永劫の問題である。さいふことである。」

科學の立場を一層明かにする爲に歴史と對照してみよう。紀平先生の「行の哲學」に於て、

「自然物と雖、既に有機物は抽象的な外的條件によりて規定し得られざるものを有すが如く、更に自己意識的な人間の行動の跡としての歴史は、最早單なる自然科學的因果法を以ては、之に向ふ能はざるは、自明の事なるべし。勿論歴史的事件は過去の事件なり。其限り「有」なり、「有」に

しての研究は、所謂客觀的ならざるべからざるは勿論の事なれども、歴史的認識は、最早單なる「有」にあらずして「當爲」の認識なり、「當爲」としては歴史的の一件を一件と承認することは、我の實現なり、價值への轉回なり、更にヘーゲルの語を以てすれば、其を對象とすることによりて、自己の内に自己を超越して、一層高き階段へ進むことなり。」

更に同著中、

「因果必然が自然科学を爲すが如くに、價值必然が歴史を作す。」

自然界の王者たる科學も人間の王國には一指も觸れる事は出來ない。科學全盛の時代には科學は人間の行動をも律し得るさへ考へられ、又一方から考へて宏大なる宇宙内の一微小存在としての人間は一個の自然物として取扱ひ得る如く考へられるかも知れないけれど、一度自我を自覺して價值の世界に生きたる時は人間は最早科學に律せられ、又小なるの故に、又部分なるの故に價值少きものとなさるる如きものではなくなる。即ち此の場合には人間は最早機械ではなく、文化と宇宙を自我に於て統一し、價值を創造して行く行爲者である。即ち人間は價值の王國の建設者である。此の自覺あつて向ふ時、科學は始めて其の眞實の立場を吾人の前にさらけ出すで

あらう。

(一一)

科學は科學の立場を持つてゐる。宗教、藝術も夫々の立場を持つてゐる。然し人間は科學でもなく、宗教でもなく、藝術でもなく、又哲學でもない。だが人間の活動といふものは科學的、宗教的、藝術的、哲學的發展の方面を有するものである。自然其自體は科學的のものでも、宗教的のものでも、藝術的のものでも、哲學的のものでもない。人間が居なくとも存在する自然といふものは如何なるものであるか、又さういふ自然は吾人の認識する自然と如何に異つてゐるか、上の二つの事柄は最早可能の世界のものではない。我々は自然と自我との對立の狀態に於てのみ、自然を認識し、自我の發展は可能であるのである。かかる唯一の可能の世界が實在であるかくて自然なくして人間無く、人間なくして自然無しと云ひ得る。されば實在としての自然は科學的、宗教的、藝術的、哲學的のものでなければならぬ。

唯一可能の世界こそ眞の宇宙である。この宇宙を本當に自分のものにするこゝが冒頭に掲げたゲーテの命題の本當の意味である。だから完全なる宇宙把持者は同時に、最高の科學者であり、最高の宗教家であり、藝術家であり、哲學者でなければならぬ。然し一箇の人間に取つて上の四者を兼ねることは可能とは思はれない。此處に個性、環境等の束縛あつて

人間は夫々の方面に分れて活動することゝなる。全てを相當に兼ねる人、一つのことを徹底的に究める人等あるのである。全體にわたる人は淺薄の嫌あり、一つのことを押し進める人は深くとも狭い嫌がある。然し之は外面的觀察に過ぎなくて内より觀れば廣狹、深淺の差別は取り拂はれるのである。それは、全體にわたる人は勿論科學、宗教、藝術、哲學を兼ねるが、一つのことを押し進めて行く人でも、其の一つの中に科學、哲學、宗教、藝術を折り込むことが出来るのである。

例へばロダンは天文學を知らなかつたかも知れない。然し彼は彼の藝術的創造の中に、科學、哲學、宗教をも投入したのである。ロダンの作品は科學、哲學、宗教、藝術の結晶である。即ち宇宙そのものである。ベートベンの音樂に於ける、レオナルドダビンチの繪畫に於ける、皆同様ではなからうか此處に於て内面的には、全てを兼ねる人も、一道に精進する人も孰れも科學、哲學、宗教、藝術の把持者、創造者として觀ることが出来る。ただ外面的に、科學と見え、哲學と見え、宗教と見え、藝術と見えるのみである。

「ただ一つの星の中にも宇宙の神祕が隠されてゐる」
ただ一つの畫でも、ただ一つの彫刻でも、それは宇宙そのものである。

トルストイも宇宙の把持者、創造者であるし、ニイチエもそ

うであれば、カント、ベートベンもそうである。更に、釋迦孔子、キリスト、ソクラテス、日蓮、ゲエテ、ダンテ、ニュートン、芭蕉、老子等もそうである。

吾人の活動は必ずしも科學的、哲學的、宗教的、藝術的とはつきり分ち得るものではあるまい。本當に一人の人間の活動が科學的であつたか宗教的であつたかするわけには行かない。宗教家必ずしも宗教家ならず、科學者必ずしも科學者でない。孰れにしても眞實の宇宙把持者、創造者である點に於てのみ價值あるものとして推薦することが出来るのである。我々は孰れの道に精進するも可、たゞ價值創造といふことを忘れてはならない。而して其の行に於ては、愚者にならなければならぬ。盲目にならなければならぬ。賢者必ずしも賢ならず。我々は賢明なる批評家たらんより、愚かなる實行者でありたい。資本家必ずしも支配者ならず、一勞働者が却つて本當の意味で支配する場合がある。

我々は愚かなる實行者として大自然の前に男一匹になつて働いてみよう。

成るか、成らないか、それは忍辱と精進によつて時の永遠を有限の人生に折り込み得るに否ににある。

時——それは吾人の創造する所のものである。

而して無限の時即ち永遠を創造する所の人は男である。

眞實の男性美の具現者である。」

西田幾多郎先生は「自覺に於ける直感と反省」の序に於て

「此書は余の思索に於ける惡戰苦闘のドッキュメントである幾多の紆餘曲折の後、余は何等の新しい思想も解決も得なかつたと言ひ得るであらう。刀折れ矢盡きて降を神祕の軍門に請ふたさいふ譚を免れないかも知れない。併し余は兎に角眞面目に一度余の思想を清算して見た。固より大方の瀏覽に供すべきものではないが、余と同様の問題を有し余と同様に解決に苦しむ人あらば、此の書縦何等の光明を與ふることもなくとも多少の同情を買ひ得るであらう。」云々。

西田先生にして此の言あり。我々は自らの知らざるを知るの境地にも至らざるの遠きものである。だが我々は或ものに對する憧憬だけは持つてゐる。即ち云はん、

我より大なる地は崇敬に値するかな

地より大なる太陽は崇敬に値するかな

太陽より大なる宇宙は崇敬に値するかな

自我より大なる道德率は崇敬に値するかな

道德率より大なる哲學は崇敬に値するかな

哲學より大なる神は崇敬に値するかな

時計改造の希望に就て

(一四)

工學士 井澤孝哉

近頃諸般の生活改善法が洋の東西に亘り高唱されつゝ、あるが餘り時計の改善を云々する聲を聞かないのは頗る遺憾の事と思ふ。尤も茲に改善といふのは時間の立方に關する革新であつて機械自身の改良の意味ではない。自分は從來此問題に付て折々考へて見たのであるが、理論と實際に差支へ無いと思ふものは唯一つしか見當らぬから、左に是に就て記載して一般世人の賛成を得んことを切に望むものである。

從來の時間の立方即ち一日が二十四時間で一時間が六十分といふ様な遣り方は之は遠く四千年の昔にバビロンの天文家に因て創められたものである。即ち日出から日没までを十二時に分ち、日没から日出までを同く十二時に分けたのである其結果自然一晝夜が二十四時と成つたのであるが、然し之は後の事で始めから一晝夜を二十四時に分けた譯では無いのである。故にバビロン人の立てた時間の立方は十二進法及び六十進法であるが、然し六十進法は十二進法が出来れば自から生るべきものであるから單に十二進法である云ふてもよからう。元來人類の智識が幼稚であつた時分には物を教へるに